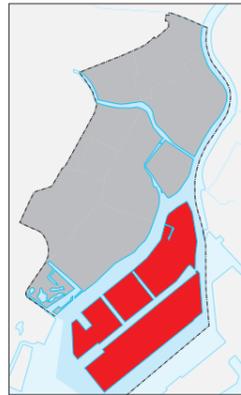




つくだ つきしま はるみ
げん ざい まち

現在の町なみ



佃一～三丁目、月島一～四丁目、勝どき一～六丁目
晴海一～五丁目、豊海町

佃島と石川島をのぞき、明治時代以降に埋め立てられてできた地域(→p.100)。造船業をはじめとした工場地帯となり、日本経済の発展と共に成長してきた。現在は、たくさんのマンションが建設されて、地下鉄の駅も増えた。晴海一帯は近代的なオフィスビルや商業施設が建ち並び、月島はもんじゃ焼きで有名だ。下町の雰囲気と最先端の町なみの、2つの表情が見られるエリアだ。



このエリアは赤い部分。

佃

このエリアで最も古い地域。今も江戸時代に創業した佃煮店があり、当時の雰囲気を感ずる路地や井戸がある。漁師町の面影を残す一方で、超高層マンションの大川端リパシティ21がそびえている。

1872(明治5)年に石川島と合併して「佃島」という町になり、1967(昭和42)年に周辺の新佃島西町、新佃島東町と合併して「佃」になった。

月島

もんじゃ焼きで有名な町。60軒以上のもんじゃ店が並ぶアーケード街の西仲通りは、もんじゃストリートとよばれ、地元の人と観光客でにぎわっている。明治時代に隅田川河口部を埋め立ててできた土地だ。町名の由来は、海に築き上げた島という意味の「築島」から月島になったという説と、東京湾に「月の岬」という月見の名所があったからという説がある。

1965(昭和40)年に、月島西河岸通、月島西仲通、月島通、月島東仲通、月島東河岸通の、それぞれ一～六丁目の町名が「月島」になった。

勝どき

勝どき一丁目と築地六丁目の間に勝鬃橋がかかり、二丁目の交差点を中心に高層マンションが建ち並んでいる。

この地区は明治から大正にかけて完成した埋め立て地。日露戦争(1904～1905年)に勝った記念でつくった「勝どきの渡し(船)」にちなんだ町名だ。勝鬃とは、戦いに勝ったときにあげる喜びの声のこと。1965(昭和40)年に、月島西河岸通、月島西仲通、月島通、月島東仲通、月島東河岸通の、それぞれ七～十二丁目が「勝どき」になった。

晴海

昭和30年代に晴海ふ頭が整備され、国際貿易港として発展してきた。現在は複合施設のトリトンスクエアを中心にオフィスが増え、今も開発が続いている。1931(昭和6)年に完成した埋め立て地。町名は、1937(昭和12)年に「晴海町」になり、1965(昭和40)年にいつも晴れた海を望むという希望から「晴海」になった。

豊海町

平成時代になって高層マンションが次々と建設され、現在も人口が増加中だ。もともと水産業の拠点としてつくられた埋め立て地で、1963(昭和38)年に完成した土地だ。運河沿いには水産会社の冷蔵倉庫が建ち並び、水産業の仕事をしている住民も多い。町名は住民アンケートで選ばれた。

見どころには○印を、重要文化財には★印をつけています。



*ほかのページで紹介している店や場所には、印をつけている。